第2部　評価会議開催法

報告書第 2 部では、各集落別に実施された評価会議の目的、使用ツール、会議方法などについて述べる。当初の予定では先行 3 集落については、それぞれ異なった方法で評価会議を実施し、その後 3 つの中から最もふさわしかった手法を、全ての集落において一律に採用していく予定であった。しかしながら実際始まってみると、各集落を終える毎に反省点が見つかり、加えて各分野・各集落の要求する内容が異なることがわかってきた。そこで、一律の手法で実施することはやめ、各集落毎にやり方を変えていくことにした。

よって、ここでは評価会議が実施された集落順にその開催方式や目的について触れ、そこでの反応の結果や、集落の持つ特殊性なども記入することで開催法の変遷がわかるようにしていきたい。基本的に第 2 部は下記のフォームに従っていくこととする。

① 評価会議実施目的と背景
② 開催方式（具体的な質問とそのねらい）
③ 使用ツール
④ 前回との相違点
⑤ 当日の状況と感想

（１）ﾁｬﾐﾝ集落　　開催日２月１９日（金）　開催場所：イマム宅

①評価会議実施目的と背景

先行集落の一つとしてチャミン集落を選定した理由としては、全く個人的なことであるが、報告者にとって馴染みが深い集落であったことである。前年度の乾季を通して報告者の実施した生活用水事業では、数回にわたる住民会議を実施しており、そこでの住民の反応というものが経験的に良いものであることが把握できていた。よって、評価会議においてある種試験的な手法を用い会議を実施することで、前年度の住民会議とどの程度住民の反応にズレがあるのかを知るのには丁度いい集落であった。

ここでの開催目的は

A)住民の反応を探り、後の開催方法の目安とする

B)生活用水事業に関する住民の生の声を改めて聞き出す

C)生活用水施設に対する維持・管理の意識を高める

の３点である。

②開催方式

まず事前の準備段階として、集落側からコーディーターを集めてもらった。説明日にはこちらの要請どおり５名集まったのであるが、よくよく話しを聞いてみると当日コーディネーターとして役割を果たせるのはそのうち２名で、残りの３名に関しては、「集まれというから緊急に集めた人材」であった。コーディネーターには会議で、司会・書記・説明役などをやるように期待していたので、これにはいささかがっかりしたが、とりあえず２名を中心に当日の開催方法と、コーディネーターの役割について説明を行った。

ﾁｬﾐﾝ集落での実施は、こちらから質問を設定し、それに対し選択肢と自由討論を織り交ぜる方式を採った。これは生活用水事業での住民会議には用いられていなかった方法である。選択肢を用意することで、住民の頭の中にぼんやりとある考えが言葉になって表われやすくなるのではないか、と考えた。

質問は全部で４つであり、それぞれの質問と選択肢は以下の通りである。

質問１Ａ　「活動に参加するときに生じた問題・困難はあるか」

選択肢

・農作業と重なっていた

・家事と重なっていた

・仕事（公務員、教師向け）と重なっていた

・プロジェクト中の作業自体とても大変なものであった

・プロジェクトに興味が持てなかった

・天候がよくなかった
・JICA 担当者からきちんとした説明がなかった
・JICA が嫌いだ
・その他

質問１B　「上記の問題・困難を解決するにはどのような方法が考えられるか」
自由討論

質問２A　「活動に参加する際にどのような期待を抱いていたか」
選択肢
・日常の家事労働を削減したい
・所得を向上したい
・生活環境を改善したい
・技術を取得したい
・日本人と活動する機会を持ちたい
・給料をもらいたい
・質の良い生活用水を手にいれたい
・知識を向上させたい
・その他

質問２B　「上記期待のうち、何が達成されて、何がまだ達成されていないか」
自由討論

そしてこれら４つの質問の後に、住民の生活用水事業に対する満足度を測る目的で、評価表を配り、１０段階でいえば、満足度は１から１０のどれに当てはまるかということを皆に考えてもらった。

各質問のねらいについては、次のように考えた。まず質問１A は、なぜ住民の間には積極的に活動に参加した人と、しなかった人がいたのか、というこちらからの疑問に対し、住民の率直な意見を聞きたかった。また活動に不参加であった理由が明らかになれば、それを質問１B で解決策という形で問い直し、今後同様の事業を行う際の参考にしたいという意図があった。

質問２A については、住民の事前の期待を探ることで、参加動機を把握しようと試みた。例えば生活用水などの基本的インフラ整備事業に対して住民が抱いているニーズは、勿論最上にはハードとしての施設が挙げられるのであろうが、その他どのような事柄が参加の促進要因となっているかについては報告者が担当している間、ずっと疑問であった。そこで２A でそれについて聞き、２B でそのうち住民がすでに達成されたと判断される事柄について聞くことにした。

最後の質問はトータルとして生活用水事業がどの程度の満足感を与えているか知る為に行った。また、満足しきっていない場合には問題を再整理し、今後の維持管理に向けて、住民の自助努力を引き出すような形にしたいと思った。

当日は6人程度ごとにグループ分けをし、より議論がしやすくなるようにつとめた。

③ 使用ツール

<グループ>

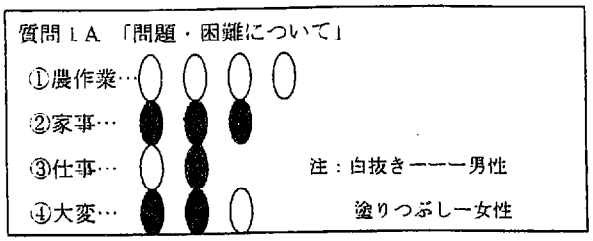
質問1A・2A用――選択肢の記入されている用紙

質問1B・2B用――小さなメモ用紙数枚とペン

最後の質問用――――評価表

質問1Aと2Aは参加者各自の感じる問題や動機を各グループで話し合った後に、全体で再討論を行った。再討論を行う際には、まず小さな色画用紙（男女別色）を各人に配布し、前面のダンボール上の選択肢に、各人が賛成と思うなら色画用紙を貼付けるという方法にした。

例：



<全体>

質問1A・1B・2A・2B用――ダンボール・出された意見を書くための小さなカード・マジック・糊

最後の質問用――――――――ダンボール・セロテープ

④前回との相違点

初めの集落なのでなし。

⑤当日の状況と感想

当日になってコーディネーターが5名集まり、事前の説明会に参加した2名を中心として会議が開始された。最初に司会役から今回の評価会議開催意図の説明を行い、続いて開催方式についても例を挙げながら説明を行ったが、参加した住民はもう一つピンとこない様子であった。次にC/Pとコーディネーターが中心となって、グループ分けがなされた。この際には男性と女性を別々のグループにし、グループ内討論がより活発になるように心がけた。

チャミン集落の場合は、グループ討論時にはその討論結果を紙に記してもらうことを期待していたので、

各グループに文字が書ける人をいることを最低の条件とし、グループ分けをしてもらうよう事前の説明を行っていたが、住民の意見によれば皆一様に文字を書くのが苦手ということであったので（実際は書くことが可能であるが、こうした会議の場では例えばスペルミスをしたり、文章がおかしくなることが恥ずかしいために遠慮してしまったのではないかと推測される）、結局は元々座っていた位置を基準にグループ分がなされた。

この後質問１Ａに移行したが、その際には司会役が改めて全体に説明をし直すという手順が省かれ、なあなあの雰囲気のまま質問とそれに対するグループ討論が始まってしまった。グループ内では、相変わらず質問内容・意図及びそれへの答え方が良く理解できていないようであり、全てのグループで混乱が見られた。そこで司会役以外のコーディネーター４名を各グループに配置し、彼らから参加者に説明を加えてもらうように促したが、彼ら自身もよく理解していなかったので、事態は収拾されなかった。結局 JICA メンバーが各グループの中に入ることで、とりあえず質問１Ａに対する回答らしきものを得ることができた。

質問１Ｂに移り、問題を解決するのに必要なものを全体で考え直そうとしたところで、参加した住民の一人から、「本当は問題はなかったのであるが、答えなければいけないようだったから、あえて答えただけだ」という意見が出され、それに何人かは同意しているようであった。よって、質問１Ａの結果を受けて質問１Ｂで議論が進展することはなかった。

この時点で既に開始から１時間以上経過しており、住民もコーディネーターも疲れが見えていた。そこで一休憩はさんだのであるが、その間に何人かは家路についてしまった。

質問２Ａに移った際にも同じような混乱が見られた。状況を観察する限りにおいては、選択肢が用意されていることがかえって理解の妨げになっているようであり、混乱の原因であるようであった。質問２Ａの回答もそれでも何とかして集め、２Ａを選んだ根拠を各グループのメンバーを指名して尋ねたところ、この点については男性も女性もよく発言をしていた。

最後の評価表はこれ以上の混乱をきたさないように、C／P が各グループを巡回し、説明を行い、結果を回収した。この時には司会役も疲れきっていたので、報告者が替わりに司会を担当し、集められた結果をもとに、各参加者に対して、「１０に満たない理由－不足しているもの、逆に成果」を聞いた。全体を前に各参加者が回答をきちんと行えるかどうか危惧していた面もあったが、皆よく答えてくれた。問題の一つが挙げられた際に住民から、その点について再度 JICA の協力が欲しい旨を提案されたが、内容が水源に溜まる水を清潔にするための薬が欲しいということであり、住民だけでも解決できると思われたので、「現在集めている維持管理費の利用法を皆で考えて、妥当だとおもったらそこから買うのはどうか」という提案をこちらからし直した。

ﾁｬﾐｼﾞ集落を終えての感想は意図したことのほとんどが満足に理解されず、消化するだけで精一杯であったということである。住民にとってはその消化すらも困難であったのではないかと思われる。特にもっとも大事な開催意図を住民に上手く伝えられなかった点は残念であった。

また方法については、いきなり「問題はなんでしょう」という漠然とした聞き方を行っても「問題はありませんでした」という答えがでやすかったのであるが、評価表を用いて「ではなぜ満足しきっていないのか」という聞き方にすると、それぞれの思うところを述べてくれるということに気づいた。

（2）ﾊﾟﾗｯｶ集落　開催日２月２６日（金）　開催場所：集落長宅

①評価会議実施目的と背景

ﾊﾟﾗｯｶ集落も先行集落の一つとして実施したが、ﾊﾟﾗｯｶ集落については報告者はそれまで活動を行ったことがなく、どのような感じになるのかまるでわからなかった。しかし、前年度にニーズ会議を担当した渡辺（雅）隊員によれば、人の集まりもよいし、意見も比較的活発にでた集落であったということであり、先行集落として適当であるだろうと勧められた。

ﾊﾟﾗｯｶ集落ではﾊﾟﾘ牛普及事業と市場修復事業、そして落花生普及事業が実施されていたが、落花生に関しては担当者である田谷隊員が病気療養のため不在であることから、今回は討論対象から外し、前２者に関してのみの評価を実施した。

ここでの開催目的は前述ﾁｬﾐﾝ集落と同様に、

A）住民の反応を探り、後の開催方法の目安とする

B）ﾊﾟﾘ牛普及事業、市場修復事業に関する住民の生の声を改めて聞き出す

C）事業に対して住民自身がより積極的に関わっていくきっかけとする

の３点である。

②開催方式

ﾁｬﾐﾝ集落同様、集落側からコーディネーターを選出し、彼らに当日の司会・書記・各グループへの説明をお願いした。前回の失敗にも懲りずにコーディネーターを村から用意してもらうことにしたのは、実際住民が行う際には内容や方法は全く異なるにしろ、この手の会議を自らで実施していくような力をつけていってもらいたいからである。会議自体の失敗は決して好ましいことではないが、失敗も一つの良い経験としてコーディネーターとなる村人が何らかのことを感じてくれればよいかな、と思っていた。また他方で、事前の説明や選出されるコーディネーター如何によっては、もっと上手な説明が参加者になされ、会議自体もうまくいくのではないか、という期待もあった。

ﾊﾟﾗｯｶ集落での実施については全てを自由討論形式にした。これはﾁｬﾐﾝ集落で選択肢方式がうまくいかなかったことから開催方法に変化を加えたのではなく、むしろﾁｬﾐﾝとの比較対象として、住民の反応を見てみたかったことが理由である。また討論内容については、ﾁｬﾐﾝ集落で設定したものに若干の質問を加えた。

各質問に関しては以下の通りである。

質問１　「JICA の○○事業とはどのようなものか」

質問２　「活動に参加／不参加の理由は」

質問３　「活動中のあなた、あるいはﾊﾟﾗｯｶ集落と JICA の協力はどのようなものだったか」

質問４　「活動を実施して感じた成果は」

質問５　「活動実施中の問題点は」

そして最後に、やはりﾁｬﾐﾝ集落と同じく、評価表を各人に配布し、１０段階の満足度について発表してもらった。

まず質問１を新たな質問項目として加えた理由には、住民が JICA、或いは JICA の活動をどのように把握・理解しているかについて聞く機会を持ちたかったためである。現在のチームプロジェクトは方針として、「住民参加」を掲げており、各分野で活動する隊員は基本的に住民と歩みを共にしているが、それが果たしてただのこちらの一方的な思い込みでしかないのか、住民側もそうすることを望んでいるのか、またそもそも JICA というものが、KKN（大学生による短期奉仕労働で、チームプロジェクト開始当時はよく KKN と JICA の活動が混同されていたという経緯がある）や季節労働者とどれだけ違うのか、という点について住民の意見をきちんと聞いてみたかった。

質問３も一部同様の理由で新たに設定した。しかし、こちらの方では暗に住民の協力なくしてプロジェクトは成立しえず、従ってより積極的な参加を引き出すために、今までの住民参加の形態を整理してみたいという意図があった。これは前述の目的でいうところのＣ）に該当する部分である。

質問１・２・４に関してはﾁｬﾐﾝ集落では選択肢を用いたものであり、そのねらいについてはほとんど変わらない。

当日は６人程度を１グループとし、質問１に関してﾊﾞﾘ牛と市場修復について話し合いを終えた後、各グループから結果を発表してもらい、次に質問２へと移行した。質問２から５も同様に行い、全部の質問が終了した時点で、結果を再整理し、全体討論を行った。

③　使用ツール

＜グループ＞

質問１・２・３・４・５用――――記入用紙・鉛筆

最後の質問用――――――――――評価表

＜全体＞

質問１・２・３・４・５用――――結果貼付け用の大きな画用紙・意見を書く用小さなカード
マジック・糊

最後の質問用――――――――――結果貼付け用ダンボール・セロテープ

④前回との相違点

・質問内容に変化を加えた

・討論方法を全て自由討論とした

⑤当日の状況と感想

事前に説明を行ったメンバーを中心に会議が開催された。ﾊﾟﾗｯｶでも司会役が理解不十分であり、開催意図について満足な説明を行えずにいた。そこで C／P が開催意図について説明をし直すことになった。グループ分けを行う際には、当日集められた出席票をもとに、司会が各参加者の名前を呼び上げ、座る位置を移動してもらうよう要請をし、各参加者はそれに従った。この時には全参加者の中で「これから何かがはじまるぞ」という雰囲気があるように見受けられ、笑いも飛び出すなどいい感じであった。

しかし、質問１が始まるとﾁｬﾐﾝ同様とたんに雰囲気は悪くなり、住民が混乱し始めた。しかもコーディネーターの手違いで、各グループに配布された記入用紙が質問２用であったために、さらに状況は悪化していた。ここでも質問に関する全体への説明が行われなかったので、JICA メンバーが各グループに入り、説明を行った。

結果発表を各グループから行ってもらい、それを司会役を除いたコーディネーターがカードに記入し直す作業は、発表する人のスピードに対応しきれず、コーディネーターの方にも混乱が見られた。結局は各グループで書かれた記入用紙を回収した後で始めてカードに転記できるという形となってしまった。質問２から６もほぼ同じように進み、その間司会役も含めコーディネーターが転記に専念してしまったので、途中から報告者が司会を代行した。

住民からは質問１から６、それぞれの質問意図がわからないという苦情があった。住民にとってしてみれば、期待も目的も結果も同じであって、それが違う言葉で何回聞かれても出せる答えは一緒であるということである。またその点については本会議が終了した時点で C／P からも意見が挙げられ、評価の際に使える言葉として適しているのは「有効性（kegunaan）・不足(kekurangan)・利益(manfaat)」の三つであり、目的を意味する tujuan は解釈が多様すぎるで住民にとっては相応しくないだろうということであった。

結局この会議も３時間もかかってやっと終了したが、疲労感の残る会議となってしまった。今回の失敗も全て原因が本人に帰せるのが、担当者として申し訳ない気持ちで一杯にさせた。また、今回最も残念であったのは、開催方式の不備から、全体的に時間配分がきちんとされず、各グループの質問発表時に、他のグループではまだ討論が続いていたりして、討論結果が住民に還元されたと言い難かったことである。

（３）ｶﾞﾙﾝ集落　　開催日２月２０日（土）　開催場所：小学校

①評価会議実施目的と背景

先行集落の３番目にはｶﾞﾙﾝ集落を選んだ。ｶﾞﾙﾝ集落も報告者としては活動を実施したことのなかった地域であるが、昨年度渡辺（雅）隊員が行った生活用水事業の進捗状況を聞く限りでは、かなり住民の自助意識が高いように思われた。渡辺隊員によれば、ｶﾞﾙﾝ集落の中にはオピニオンリーダーが何

人がいるほか、施工のテクニカルな面でもリーダーシップをとれる人材が数人いて、結果としては集落全体が、自分達で何とかしようという雰囲気をもっているという。ｶﾞﾙﾝ集落を先行集落と決定した段階では、ﾁｬﾐﾝやﾊﾞﾗｯｶの評価会議を実施していなかったので、ｶﾞﾙﾝでこそ住民の中からコーディネーターを選出し、彼らに任せた評価会議の実施を行いたいという強い気概はなかったが、それでもｶﾞﾙﾝではとにかくうまくいくのではないか、と漠然と考えていた。逆にいえば、ｶﾞﾙﾝ集落でもうまくいかないようであれば、根本的に評価会議の開催法を見直すべきであろうと感じていた。

ｶﾞﾙﾝでの開催目的については前述の２集落と同様である。尚、ｶﾞﾙﾝで行われた既存のプロジェクトは生活用水事業、新種野菜普及事業、農民研修事業であり、それに加えて渡辺（竜）隊員が企画して、実施されたサッカー大会があり、これも評価の項目に入れた。

②開催方式

ｶﾞﾙﾝ集落に関しては特に、住民自身で会議を運営できるという期待があったため、やはり事前の準備としては、村側から集められたコーディネーターに対して、こちらの意図する開催方法を伝え、当日の司会をまかせることにした。ｶﾞﾙﾝ集落では当初、質問の１番目に「活動中の問題は何か」ということを自由討論で話してもらうように考えていたが、ﾁｬﾐﾝの項でも述べたように「問題は何か」という漠然とした聞き方よりも、１０段階の評価表を用いて、「なぜ１０に満たないのか、不足と感じているものは何か」という聞き方をした方が、話しがしやすかったようなので、今まで最後に行っていた満足度に関する質問を最初のとっかかりとして持ってきて、その後に質問を続けることとした。

また前回のﾊﾞﾗｯｶ集落で、あまりに時間がかかりすぎたことから、質問をよりコンパクトにするように心がけた。よって、ｶﾞﾙﾝ集落では次のような質問が次のような順序で行われた。

あ）最初に評価表を配り、各自に記入してもらったあとに、前面に結果を貼り出す。

い）出された結果をもとに、司会者から各自に対し、「なぜ１０段階のうちの○なのか。もし１０に満たない場合は、不足と感じているものやその原因、１０の場合はその成果」について口頭で質問をし、答えてもらった。

う）出された問題点・成果を書記が列挙し、それを前面に貼り出す。

え）問題の解決策についてグループ討論を行い、結果を発表

ﾁｬﾐﾝやﾊﾞﾗｯｶで一つの質問として設定していた、「事前の期待」については、い）を各人が述べている間に、こちらで解釈できるのではないかと思われ、今回は削除した。また え）に該当する項目を考えてもらっているのは、問題解決の全責任を JICA に委託するのではなく、自らの想像と能力に対しても自己評価を行い、自分達でできる事柄を探していってもらいたいという意図があった。

ｶﾞﾙﾝ集落で実施された上述４つの活動について、まず あ）について全て行い、次に い）に移行するよう想定していたが、当日の司会者はまず生活用水事業に関し、あ）から え）まで通して行い、次に新種野菜普及事業に関し、あ）から え）まで通すという方針であった。特にこだわる理由がないし、参加者の間で混乱も生じていなかったようなので、流れに任せていた。

③使用ツール

<グループ>

最初の質問用（あ用）――――――――評価表・鉛筆

最後の質問用（え用）――――――――記入用紙

<全体>

最初の質問用――――――――ダンボール・セロテープ

質問に対する各自の答え用――ダンボール・記入用小さなカード・マジック・セロテープ

最後の質問に対する解決策用―ダンボール・記入用小さなカード・マジック・セロテープ

住民側で用意したもの――――マイク

④前回との相違点

・質問内容と順番を大幅に変更し、短時間で終了するようにした

・住民に司会を任せても混乱しないように、内容を簡素化した

⑤当日の状況と感想

ｶﾞﾙﾝ集落ではさほど住民に混乱がなく、JICA メンバーも忙しくならずに会議ができた。会議は村長の開会挨拶で幕を開け、続いて司会から会議の開催意図説明と、開催方式の説明が行われたが、この時の説明が、他集落と比較するとかなりよい説明の仕方であった。またマイクを使用していた為、司会の声が全参加者にきちんと行き届き、参加者の方でも聞く心構えができていたことが良かったのであろうと考えられる。

質問に移行してからも、その度毎に改めて司会から説明が加えられたので、住民は大きな混乱なくグループ討論をすることが可能であった。質問を簡素化したことが、より住民の意見を引き出しやすくしたことも事実であろう。

よって、ｶﾞﾙﾝ集落においては開催方式自体ではあまり問題が生じることなく、会議を終了することができたと思われる。ｶﾞﾙﾝでの問題を挙げるとすれば、出された意見が一部のオピニオンリーダーのものであり、それが全住民の意見を反映しているかどうかは疑わしい点である。例えば評価表を最初に配布し、ﾁｬﾐｼで行ったように「１０に満たない理由」を司会から名指しで各参加者に答えてもらおうと試みたが、指名された人が答えるのではなく、その近くにいたオピニオンリーダーが勝手に答えてしまうということが続いた。全体に話し合いを移しても、結局彼らが話しをするだけで、意見を言わない人は最後まで意見を言う機会がなかった。

かかった時間としては２時間程度であり、少し予定よりは長くなったが、許容される範囲内であったのではないかと推察される。

（4）ﾊﾞﾗﾝ集落　　開催日３月２日（火）　開催場所：ﾄﾝﾎﾞ村役場

①評価会議開催目的と背景

先行集落での住民の反応をみる限りにおいては、ｶﾞﾙﾝ集落における開催方式が最も混乱が少なく、話しにも流れがでてくることがわかった。そこで、ﾊﾞﾗﾝ集落での評価会議にもｶﾞﾙﾝ方式を採用することにした。開催目的については、事業に対する住民の生の声を聞き出すことを中心とし、もし問題があるようであれば、それに関し住民がどのような解決を考えているかを話し合う場とすることとした。

②開催方式

ｶﾞﾙﾝ集落では住民に司会役を任せても、十分うまくいくことが確認された。よってﾊﾞﾗﾝ集落での実施も住民に会議の開催意図とやり方を伝え、任せてみようと思っていたが、事前の説明日にきちんと人が集まらず、断念した。そこでﾊﾞﾗﾝ集落ではこちらが司会も書記もグループへの説明も行った。

質問内容とその聴き方に関してはｶﾞﾙﾝと全く一緒であるが、ﾊﾞﾗﾝでは、まず あ）について実施された市場修復事業・バリ牛普及事業・新種野菜普及事業に関して通して行った後、 い）に移行した。

③使用ツール

ｶﾞﾙﾝと一緒の為、そちらを参照のこと。

④前回との相違点

・司会が住民ではなかった

⑤当日の状況と感想

ﾊﾞﾗﾝ集落でもｶﾞﾙﾝと同じように、もしくはそれ以上に流れよく会議が進行した。ここでは司会が C／P であったことに加え、事前準備に村人が集まらなかった為、グループ分けをした後、直接 JICA メンバーがグループの中に入り、意図説明を行ったのがよかったと思う。

C／P の司会ぶりも大変立派であり、例えば評価表を配布したのち、参加者がなぜその得点をつけたか理由を聞く際に、同じような質問の仕方では場がだれてくることを感じ、質問方法を随所で変え、刺激を与えつづけていた。また当日、県家畜事務所長も参加し、（多少答えを誘導してしまったような所もあったとしても）、彼も積極的に住民から意見を引き出すこと努力をしていた。

参加者である村人も、とりわけﾊﾞﾘ牛に関しては熱心に話しを行うなど、テンポのよい会議の進行に戸惑いを見せることがなかったように思われた。

あえて問題を挙げるとすれば、開催方式がもつ問題というよりは住民の意識についてであり、県家畜事務所からも参加があった為か、家畜事務所・ JICA 双方へお願いをする傾向が強かったということである。

（5）ﾍﾟﾚﾏﾘﾝﾎﾞ集落　開催日３月５日（金）　開催場所：集落長宅

①評価会議開催目的と背景

ｶﾞﾙﾝ・ﾊﾞﾗﾝと比較的スムーズに会議が実施されて、５番目の集落はﾍﾟﾚﾏﾘﾝﾎﾞ集落であった。ﾍﾟﾚﾏﾘﾝﾎﾞ集落は、今まで生活用水事業が行われ、また山羊銀行の活動が開始されようとしている集落である。そのどちらも担当している渡辺（雅）隊員に、ﾍﾟﾚﾏﾘﾝﾎﾞ集落においてもｶﾞﾙﾝやﾊﾞﾗﾝと同様の手法で評価会議を実施するのが相応しいか尋ねたところ、

―ﾍﾟﾚﾏﾘﾝﾎﾞ集落で同様の評価会議を実施することにはなんら異存はないが、特に生活用水に関しては「勝手にパイプに穴を空け、各戸に引水をしている人がいる」といったことや、「設置したタンクに水が溜まらず、水の流れにくい区域がある」といった問題が住民から挙げられてきているので、評価会議をやる前に、その点について住民や維持管理の委員と話し合いがしたい―

という回答を得た。

ここで、評価会議を実施する意義について改めて考えてみると、今までの４集落では、事業の中で発生した見えにくい問題点を明確にすることが一つ挙げられると思われるが、ﾍﾟﾚﾏﾘﾝﾎﾞ集落の生活用水事業に関しては、住民がすでに自覚している問題というのがあるようであった。また評価会議をどのような方法でやるにしろ、渡辺隊員はこの問題解決の為に、住民と話し合う必要性を感じていた。

報告者としては、これを評価会議の一環として扱えないか、と考えていた。住民による評価ということに重点を置くとするならば、事業に対する満足度を聞いたり、期待と照らし合わせて得られた効果などを聞いたりする方がより適当であるとも思ったが、事業後の維持管理過程で生じた問題を話し合うことは、住民による評価後の事業継続性にインパクトを与え得るだろうと思われた。そこで、それ以前の４集落では、評価会議の最中に明らかにされた問題点に対する解決案を皆で話し合うことを目的の一つとして付加していたが、既に具体的な問題が見えているﾍﾟﾚﾏﾘﾝﾎﾞ集落では、解決案について話し合うことを目的の中心に据え、評価会議を実施することに決定した。

ここでの開催目的は、それゆえ

A) 生活用水の維持・管理に関する自助努力を促進する

に限定される（得られる情報も JICA にとって重要であるのではなく、村人にとって必要な情報となる）。

②開催方式

上述の開催目的より、評価会議の際には、生活用水事業の維持管理委員が中心となって、話しがすすんでいくことが望まれた。そこで、事前のプレ・ミーティングには維持管理委員会のメンバーを集め、住民会議の開催意図と、現在抱えている問題の再整理を行った。当日の司会も彼らに託し、住民が主体となって問題解決に向かう図を描いていたのであるが、維持管理委員会のメンバーの中で、司会役として相応しい人物がおらず、またメンバー同士もお互いに牽制をし合っているような状態であったので、その場にたまたま居合わせた元気のいい若者に司会役をお願いした。

しかし、当日になって彼は現場に現れなかった。そこで急遽こちらが司会進行を努めることになった。

会議の中ではプレ・ミーティングの際に確認された問題点を中心に、その原因や解決策について話し合うこととし、あらかじめその順番などは決定せず、その場の雰囲気にまかせた。前日に確認されていた問題は以下の通りである。

・施設建設の際に労働参加をしなかった人が水を使用する場合には、Rp50000 を支払って権利を買い取らなければいけないという決定を集落の合意で定めたが、それをまだ支払っていない者が2名いる。

・水が十分に行き届いていない

・タンクに水が溜まらない

またこれらに加え、当日の話し合いの中で、以下の問題も指摘され、解決策が検討された。

・維持管理に要する費用 Rp 500／rumah がまだ回収され始めていない

尚、ﾍﾞﾚﾏﾘﾝﾎﾞ集落では、グループ分けを行ってグループ討論という形を採らず、終始全体で討論を行った。

③使用ツール

＜全体＞

集落の略図（敷設されたパイプ、設置されたタンクが描かれたもの）

ホワイトボード一式

④前回との相違点

・開催目的を「評価」重視から「問題解決」重視に移行

・グループ分けを行わずに全体で討論

・質問の順番をあらかじめ決定せず、場の流れにあわせ対応

⑤当日の状況と感想

ﾍﾞﾚﾏﾘﾝﾎﾞ集落では開催目的と方式を全く変え、C／P 司会のもと柔軟な流れに任せて会議が進行されていたので、住民も比較的話しがしやすかったのではないかと思われた。

渡辺（雅）隊員の用意したﾍﾞﾚﾏﾘﾝﾎﾞ集落地図をとり囲み、あそこはどうだ、ここはどうだという自由な意見が飛び交い、雰囲気としてもなかなかよかった。また随所で、生活用水事業を担当した渡辺（雅）隊員から状況確認や説明・提案を行ったので、住民もよりよい維持管理の為に話し合いができたと思われる。

いくつか問題を挙げると、まず参加者の割合に対して会議場である集落長宅が狭く、何人かの参加者は家の中に入れなかったこと。支払を終えていない人の名前を集落長が呼び上げてしまったので、皆で「何故」ということを追いつめるような形で聞いてしまったこと。司会役である C／P がある意味ではまとめすぎてしまって、答えらしきものもその場で発表してしまったことなどがある。

（６）ﾊﾟﾝｹﾞ集落　開催日３月１９日（金）　開催場所：モスク

①評価会議開催目的と背景

ﾊﾟﾝｹﾞ集落では、現在までに生活用水事業・ﾊﾟﾘ牛普及事業・落花生優良種子普及事業が実施されている。事前の準備段階では特筆すべきことが見あたらなかったので、ｶﾞﾙﾝ・ﾊﾞﾗﾝ方式にのっとり、評価会議を実施することにした。

開催目的についても２集落と同じである。

②開催方式

これも２集落と同様であるが、ﾊﾟﾝｹﾞ集落では事前に村側からコーディネーターを選出してもらい、住民が会議を運営するように促した。

③使用ツール

ｶﾞﾙﾝ集落参照。

④前回との相違点

・開催目的を「評価」重視に戻すことを想定していた
・グループ分けを行い、グループ討論も実施した
・質問の順番などをあらかじめ設定し、事前に司会役に説明した

⑤当日の状況と感想

ﾊﾞﾝｹﾞでは司会を住民に戻したのであるが、これがまた完全に失敗に終わった。開始時にはこちらからの事前説明通り、開催意図や開催方式を参加者に対して説明をしたが、その説明も渡した台本を読み上げるだけで、わかりやすい説明を行うことができず、参加者も理解している様子ではなかった。

またﾊﾞﾝｹﾞの場合はコーディネーターへの事前説明不足に加え、グループ分けした討論では、落花生やﾊﾞﾘ牛に関しては全体の参加者の中で、受益者の占める割合が極端に低かったため（４０名中それぞれ３名、４名）、話し合いにならなかった。そこで途中からは生活用水事業に限定して話し合いを行った。

しかし生活用水に関して、問題点と解決策を各参加者・各グループに発表してもらうと、全て「水が不十分だ」という答えであり、それ以外の意見を述べる人がいなかった。司会役が新たな意見を汲み上げたり、問題を掘り下げようとせず、ただ順番に消化していこうとしていたので、また途中から司会を報告者が代行した。

そこからようやく何人かの参加者を通して水が不十分な理由について語ってもらい、参加者同士の意見を共有・交換することが可能になったが、全体の会運営としては問題点が多かった。

本会議を終了して同行したＣ／Ｐから以下のような指摘を受けた。

1. 評価表については３point と４point の違いが住民にとっては明らかでなく、結局満足しているのか、していないのかを聞くだけになっている。あらかじめこちらから予想される効果を１０個なりあげて、その一つ一つを１point とする加算方式をとったほうがよい。
2. 司会などは JICA がやるべき。住民にいきなり任せようとしてもどのようにやればよいのかの具体的なイメージが湧いてこないだろうし、正しい説明がされていかなければ、そもそも参加している村人の興味が薄れ、困惑する。会議の進行中にこちらから、村人を巻き込んでいくようにすればよい。
3. 受益者にはあらかじめ、特別に参加を希望する招待状を出し、その他の人は一般の招待状を出すという形をとると、今日みたいに受益者の大半が参加しないということはなくなる。

これらの指摘は現在の問題の核心をついており、開催方式の基本方針について変更する必要があることを強く感じさせられた。

（７）ｹﾞﾚﾝｹﾞ集落　開催日４月９日（金）　開催場所：ｱﾅﾊﾞﾇｱ村役場

①評価会議開催目的と背景

ｹﾞﾚﾝｹﾞ集落で現在までに展開されている事業は、ﾊﾞﾘ牛普及事業と山羊銀行であるが、このうちﾊﾞﾘ牛普及事業に関しては、後のﾊﾞﾝｶﾞﾊﾞﾝｶﾞｴ集落の項で述べるように、現段階で評価を実施するのが相応しくないのでは、という指摘を担当の吉田隊員から受けた。それでもﾊﾞﾝｶﾞﾊﾞﾝｶﾞｴ集落の場合は、他事業との重なりがなく、ﾊﾞﾘ牛普及事業に関してのみの話し合いの時間が設けられるため、評価会

議の一環として会議を実施したが、ｹﾞﾚﾝｹﾞ集落においては、時間的な制約もあって、一度に二つのことを話し合うのは困難であることが予想された。そこで、ｹﾞﾚﾝｹﾞ集落に関しては、山羊銀行についてのみ話し合いの対象とした。

山羊銀行のみを対象と決めたのち、担当の渡辺（雅）隊員と吉川隊員より、ちょうど日程が毎月の定例会の日と重なるので、一緒にしても構わないかという打診を受けた。その事は、特に問題とは思われず、むしろ会議自体をよくしていく要素であると思われたので、評価会議と定例会を兼ねた会議を開催することとした。

山羊銀行プロジェクトは昨年度よりこのｹﾞﾚﾝｹﾞ集落とﾜﾄｩ集落で実施され、今年度からﾍﾞﾚﾏﾘﾝﾎﾞ集落とﾁｬﾐﾝ集落で開始される予定となっている事業であるが、第１部でも述べた通りに、ﾜﾄｩ集落では活動が既に終了している。このことの理由が、よくわかり兼ねていた。そこでこの評価会議を通して、なぜｹﾞﾚﾝｹﾞ集落では山羊銀行プロジェクトが継続され、ﾜﾄｩでは終了してしまったのか、その原因を探ることを一つの目的として付加した。

よって開催目的は、

A) 山羊銀行プロジェクトへの住民の嗜好・理解度を探り、今後の活動の参考とする

B) 住民が不足を感じている知識に関しては、その場で講義する

C) 後のﾜﾄｩ集落と比較し、プロジェクト成功のキーを探る

の３点である。

②開催方式

ｹﾞﾚﾝｹﾞ集落では前回のﾊﾞﾝｹﾞでの反省から、司会はこちらでやることとし、事前の説明会は実施しなかった。また評価表についても、それを配布し、各人に記入してもらうのではなく、加算方式でやろうと試みた。しかしながら、ポイントしてこちらが想定した項目が１５にも及び、これを住民に判断させると、ﾁｬﾐﾝ集落でのような混乱を招くことが予想された。そこで、これらの項目をそれぞれ独立の一つの質問として設定し、それに対して住民は YES か NO かを答えるだけのものとした。そしてその結果をもとに、なぜそのような考えをもつに至ったのか、原因は、現象はと問い直すことで住民の理解度、満足度、嗜好などを把握することに努めた。

当日行われた質問は以下の通りである。

・グループで協力して飼育ができるようになった

・Kertas Isian を毎日記入する習慣がついた

・雌山羊が妊娠したかどうかわかるようになった

・雌山羊が発情しているかどうかわかるようになった

・山羊の妊娠期間がわかった

・山羊の好きな草、きらいな草、また薬になる草の種類がわかった

・雨の日は小屋飼い、晴れた日は外に出す習慣がついた

・仔山羊への授乳方法を覚えた

・月例会には毎回出席した
・JICA はゲレンゲの気候にあった山羊を導入してくれた
・JICA の巡回が頻繁に行われた
・質問に対して JICA は熱心に答えてくれた
・山羊が病気をしなくなった
・山羊の病気の対象法がわかった
・山羊の市場動向に詳しくなった
・山羊の飼育が楽しくなった

③使用ツール

各質問はこちらから読み上げ、それに対し YES か NO かは色別の画用紙を配布し、表示するようにした。
YES－青画用紙
NO －黄色画用紙
＜全体＞
ホワイトボード一式

④前回との相違点

・評価表を配布するのをやめた
・活動参加動機、感じられた成果など考え得る影響をこちらで用意し、それらに住民が賛成なのか、反対なのかを聞くという方式を採った
・グループ討論ではなく、一人一人を対象とした
・司会を住民に委託するのをやめた

⑤当日の状況と感想

また今回新たな方式を採用してみたが、会議としては成功の部類に入れてもいいのではないか。司会役の C／P は質問の内容についても、その答え方についてもできるだけ参加者にわかりやすい平易な言葉を使った上、一回の質問に対し、参加者がとりあえず答えるべき事柄が YES／NO のどちらかだけであるので、進行はスムーズであった。この方式は実はﾁｬﾐﾝでとった選択式と結局は一緒のことを違う遣り方でやっているだけなのであるが、やり方を少し変えれば住民の反応が大きく違うことを改めて知らされた。

つまり、ﾁｬﾐﾝにおいては選択肢の書かれた用紙をグループに配布し、グループ内で討論をすることを要求した結果、討論が活発に起こらず住民は混乱してしまうだけであったのに対し、ｹﾞﾚﾝｹﾞではそ

の選択肢となるべき事柄を司会が一つ一つ読み上げ、参加者はその一つ一つに反応を示せばよいので、理解しやすかったのだろうと思われる。

また予想されていたことではあったが、YES／NO は参加者同士が他人を牽制しながら結果を表示するので、収集されたデータに統計的信憑性は全くない。むしろ参加者が本音になるのは、YES／NO の後に、こちらが出す質問へ答える時である。

（８）ﾊﾞﾝｶﾞﾊﾞﾝｶﾞｴ集落　開催日：４月１０日（土）　開催場所：集落長宅

①評価会議開催目的と背景

ﾊﾞﾝｶﾞﾊﾞﾝｶﾞｴ集落ではﾊﾞﾘ牛普及事業が展開されている。ﾊﾞﾘ牛普及事業に関してはそれまで、ﾊﾞﾗｯｶ集落及びﾊﾞﾗﾝ集落で評価会議を実施していたが、そのいずれにおいても住民がまっさきに挙げる問題点は「まだ仔牛が産まれていない」であり、逆に成果としてあがることは「もう仔牛が産まれた」であった。勿論このこと自体は住民の感じる問題であり、成果であるので、重要な意見ではあるが、それが今後の事業運営に改善を迫るのかといえば、そうではない気がした。この点に関しては担当の吉田隊員からも次のような指摘を受けた。

―各集落に導入されているﾊﾞﾘ牛はまだ年齢が若く、仔牛を産むのに適していない個体が多い。ﾊﾞﾘ牛普及事業の目的は、県家畜事務所の目指すところと同様に、県内のﾊﾞﾘ牛の頭数を増やすことであるが、個々の農家にとってみれば、仔牛が産まれるかどうか、それによって収入向上の機会が増えるか、増えないかの方が大事である。今後、現在導入中のﾊﾞﾘ牛がもっと仔牛を産むようになってからは、返却システムの問題なども住民にとって身近なこととなり、事業自体の抱える問題が明らかになってくるだろうが、現在事業評価という形を伴って住民側の意見を引き出そうとしても、あまり有効な意見はでにくいと思われる。

現在までに JICA は、病気に罹った牛への注射、枠場つくりの材料提供、虫除けスプレーの噴射、体重測定、ビタミン剤の投与、肥育勉強会を実施し、またそれらに加え日々の巡回の際に、気づいた点について口頭指導を行ってきたが、ある種の技術パッケージのような感じで一律に技術を導入することはしなかった。これは対象となる住民の数が多い上、人により肥育法が異なる為、適正な技術を見つけるのが難しかったからである。

例えば会議という形で、ﾊﾞﾘ牛の事業を見直すのであったら、事業自体の効果や、妥当性について住民の意見を聞くのではなく、それぞれの住民のﾊﾞﾘ牛飼育状況に関する意見交換の場として、皆で牛を増やすためにはどうするか考えてみるのがいいと思う―

これは実に的確な指摘であり、担当者ならではの現場の状況を掴んだ発言であった。今回の一連の評価会議において一律の目的や、一定の手法で実施することは、この頃には完全にあきらめており、それよりむしろ各集落・各分野の現状に則した会議法と内容を考えたほうがよいだろうと思っていた。

そこで、ﾊﾞﾝｶﾞﾊﾞﾝｶﾞｴ集落の評価会議開催目的は「事業に対する住民の生の声を聞き出すこと」に重点を置くのではなく、「所得向上（仔牛を産む）目的に照らし、慣行肥育法が適切であるかどうか

について住民間で意見交換をする場」とした。

②開催方式

事前に大まかな流れを決めておき、あとはその場の流れに応じて、質問を加えたり、減らしたりと、比較的柔軟な方法で会議を進行した。実際は以下のような流れで進んでいった。

・集落の簡単な図を２枚用意し、それぞれを雨季・乾季として、農民が季節に応じて、どこで牛を飼っているか聞く
・農民は牛に見立てた小さなカードを地図上に置いていく
・既に仔牛の産まれている牛にチェックをする
・仔牛を産んだ牛とまだ産んでいない牛の飼育場所を再確認し、この違いが飼育場所からくるのか、それ以外の要因から来るのか農民に意見を求める
・ﾊﾞﾘ牛を肥育している目的を確認する
・目的を達成する為に必要なことがらを整理する
・現在の肥育法が目的を達成するのに適しているか住民同士話しあってもらう

尚、ｹﾞﾚｼﾞｹﾞ同様司会進行はこちらが担当し、また参加人数が少なかったことから、グループ分けせず、全体で討論をした。

③使用ツール

集落の略図２枚
牛を示す小さなカード
＜全体＞
ホワイトボード一式

④前回との相違点

・「慣行肥育法」を農民自身でチェックすることを、目的の中心に据えた
・YES／NO 式の聞き方はとらなかった

⑤当日の状況と感想

参加者が思ったより少なかったが、通常どおり会議を始めた。ここでは開催目的の相違からまた新しい方法を試したのであるが、参加者の理解とともに会を進行していくように心がけたので、以前他集落で見られるような混乱はなかった。

当日はﾊﾞﾗｯｶ村 Ketua 1 LKMD（村落開発委員長）が参加し、彼が意見誘導をしていくような点が

随所で見られたが、他の参加者も機会のある毎に発言をしていた。この集落では慣行肥育法を見直す、という開催目的から、現在どのような肥育法をとっており、牛をもっと増やすためにはどのような肥育法が好ましいかということを議論の中心としていたのであるが、参加者の述べるところによると、慣行肥育法の中に存在するいくつかの問題も諸状況を考慮すれば仕様がなく、これを変えることは難しいという話しであった。

本当にそれでよいのかは少し疑問もあったが、あまりこちらからこうすべき、ということは言えないので、極端な提案や指導は控えた。

会議終了時には Ketua 1 LKMD から「このように住民にとって必要な情報を公開してくれる会議は賛成だ」という意見が述べられた。

（9）ﾜﾄｳ集落　　開催日４月１４日（水）　開催場所：ナヒルディン宅

①評価会議開催目的と背景

ｹﾞﾚﾝｹﾞの項でも少し述べたように、ﾜﾄｳ集落では山羊銀行プロジェクトが展開していたが、現在は活動が終了し、全ての山羊は引き上げられている。実施最中の問題のいくつかはインフォーマルな形で参加メンバーから集められ、漠然とした答えらしきものにたどり着いてはいたが、それが事業の障害となる決定的要因なのかについては判断が下せない状態であった。

また同時期に開始された一方が継続され、他方が終了になった、その違いや原因についても、体系的な理解を得るまでには至っていなかった。

よって、ﾜﾄｳ集落の評価会議では、今までの集められた情報も参考にしながら、山羊銀行のﾜﾄｳ集落における展開の問題を探ることとした。

ここでの開催目的が JICA の今後の活動に役立てるため、すなわち会議を通して得られる情報は住民にとってほとんど価値がない、という形にならざるをえないことは少し抵抗があったものの、それを代替するような案が浮かんでこなかったので、思った通りの方式で会議を実施した。

②開催方式

結果をｹﾞﾚﾝｹﾞと比較するためにいくつかの質問事項については、同じものを使用した。またｹﾞﾚﾝｹﾞ集落で YES／NO 式を用いて会議を実施したところ、住民の中に混乱はほとんど見られず、その後にこちらから興味のある点について問い直しをすれば、単純な YES／NO より一歩掘り下げられた議論が可能であることがわかったので、ﾜﾄｳ集落でも同様の手法で実施することにした。

当日、ﾜﾄｳで実施した質問は以下の通りである。（原案は渡辺（雅）隊員とカウンターパートの HEMA による）

A) もし山羊ではなく、次のような他プロジェクトがあったら、参加をしたいか
またこれらについて、それがグループ活動だったら、同じように参加したいか

・牛プロジェクト
・馬プロジェクト
・鶏プロジェクト
・裁縫教室
・料理教室
・栄養講座
・新種野菜プロジェクト

B) なぜ山羊銀行プロジェクトに参加することを決めたのか

・山羊が欲しかった
・グループの共同飼育システムが興味深かった
・友人に連れられて
・しょうがなく
・他に仕事がなかったから
・山羊飼育の知識を向上させたかった
・日本人の活動ぶりを見てみたかった
・山羊の飼育が簡単だと思った

C) なぜ山羊銀行プロジェクトは終了してしまったのか

・共同飼育システムがよくなかった
・山羊自体が適していなかった
　－よく病気になった
　－子どもを産まなかった
　－死にやすかった
・飼育のための時間がなかった
・JICA からの指導内容がよくなかった
・JICA からの指導頻度が不足していた
・やめさせられた
・やりたくなくなった／飽きた
　－山羊飼育自体に飽きた
　－共同飼育に飽きた
・JICA のとったシステムはワトゥ集落には適していなかった
・山羊飼育が難しかった
・個人の利益がなかった

・友達も飼育を止めたので

D)　山羊銀行プロジェクトへの印象

・家事以外の仕事があって楽しかった

・友達と一緒に活動をして楽しかった

・JICA の指導頻度は足りなかった

・JICA の指導内容は適当ではなかった

・山羊銀行プロジェクトを通して飼育知識は向上した

・山羊の餌となる草が集落内には足りなかった

まず、質問 A は住民ニーズの幅と相互間のプライオリティを聞く為に設定した。これは仮説であるが、山羊銀行が終了してしまった理由として、山羊飼育へのニーズはあらかじめ住民の中に存在しかつ現在も引き続きニーズはあるものの、日常生活の中での相対的価値が低い為に、時間がかけられなくなり、結果的に飼育がされなくなってきたことも考えられる。この場合、例えば他のプロジェクトを企画し、それがより住民ニーズに沿ったものであれば、同じような仕組みを伴っても終了することはなかったのではないかと考えられる。

また、グループ活動でもそれを行いたいか、という聞き方をあえてした理由には、事前のインフォーマルな話しで挙がっていた、山羊の共同飼育システムに問題があるということが、「山羊」の共同飼育に問題があるのか、山羊の「共同飼育」に問題があるのか、を探る意図があった。

質問 B はﾁｬﾐﾝなどでも実施したように事前の期待を聞いた。報告者がことある度にこのような問いを住民に対して行うのは、「評価」というものが「事前の期待」と「事後の結果」のズレ対する、個々人の主観的判断によって成っていると考えるためである。

そして、質問 C ではさらに問題の核心に迫る為、それぞれ問題点と思われる点を挙げ、結局何が中心的問題なのかを探った。

質問 D は、終了してしまったプロジェクトも、その実施過程の中では何か住民にインパクトを与えたのではないかと思い、設定した。

③使用ツール

ｹﾞﾚﾝｹﾞに準ずる

④前回との相違点

・YES／NO 式に戻した

・収集される情報は住民にとって役立つのではなく、その全てが JICA の為であった

⑤当日の状況と感想

開催前に最も心配されていた「住民にとって必要な情報を話し合う場ではない」ということは、参加者の協力によって問題とされずに済んだ。

ここでもｹﾞﾚﾝｹﾞ同様にYES／NO結果は他人の意見を参考としながら全員が意思表示したものなので、統計的な信憑性はない。

また進行中に問題となったのは、質問Ｃを尋ねるときの文章が否定文である時が多く、その回答のYESは文章への賛成を示すのか、文章が肯定であることを想定したYESなのかー例：共同システムがよくなかった→YES；よくなかった or YES；よかったーが質問する側であるこちらも、答える側である参加者も双方で誤解が生じ、少し混乱する場面も見られた。

その他の点について特に気づいたことは見当たらなかった。

（１０）ｶﾚﾝｹﾞ集落　開催日４月１６日（金）　開催場所：ﾊﾟﾗｯｶ村役場

①評価会議開催目的と背景

ｶﾚﾝｹﾞ集落では、落花生優良種子普及事業と灌漑事業（２ヶ所）に関して、評価を実施した。しかし、第１部の各分野別事業概要で見てきた通り、落花生優良種子事業は現在、事業として終了しているほか、灌漑事業の完成したｼﾞｬﾝﾊﾞｴ地区は洪水で崩壊し、ﾗﾄﾊﾞﾝ地区は完成を見る前に、諸事情により、活動を中断していたため、開催方式はできるだけ住民に負担をかけないように配慮された。
また、ｼﾞｬﾝﾊﾞｴ地区の灌漑事業に関しては、今年度 JICA の支援による改修計画があるものの、他の事業については、基本的に事業を継続する予定がなかったので、例えばﾗﾄﾊﾞﾝに対しては過度な期待を抱かせないなど、それぞれの状況にあわせ、目的が決められた。

よって、ここでの開催目的は、

A）落花生普及事業全般に対する住民の意見を尋ねる

B）灌漑ｼﾞｬﾝﾊﾞｴ地区事業評価と今後の展開について意見交換を行う

C）灌漑ﾗﾄﾊﾞﾝ地区の、特にシステムに対する住民の意見を尋ねる

の３点である。

②開催方式

既に実施されていた９集落をトータルで見直した場合、住民の負担が最も少なく、会議の進行が円滑に進んでいると思われたのは、ｹﾞﾚﾝｹﾞを代表とするYES／NO方式であった。評価会議には、受益者でない住民も参加し、かつ彼らもYES／NOに一票を投じたり、受益者の多くは他人の表示するカードを見た後に、自分の判断を下したりするので、統計的な信憑性は全くないが、それでも全体的な傾向はこちらでも把握できるし、YES／NO を表示した後の方が住民が意見をいいやすいようであっ

たので、ｶﾚﾝｹﾞ集落においてもYES／NO方式を採用することとした。

質問の内容は、その置かれている状況の類似性から、ﾘﾄｳ集落で使用した質問のいくつかを真似た。実際行った質問は以下の通り。

《落花生優良種子普及事業》

A) 落花生優良種子普及事業に参加することを決定した理由

・品質のよい種子が欲しかった

・返却システムが興味深かった

・友達に連れられて

・しようがなく

・他に仕事がなかったから

・栽培知識を向上させたかった

・日本人の活動ぶりに興味があった

・商人よりもよい返却率であったから

そして、ﾘﾄｳ集落では聞きそびれていた、「上記参加動機のうち主要因は何か」という質問を追加した。

B) 落花生優良種子普及事業に対する印象

・JICAの指導内容が適切であった

・JICAの指導頻度は十分であった

・貸与された種子はよかった

・栽培時の栽培環境はよかった

・個人的な利益があった

・栽培知識を向上できた

・収穫された落花生は在来のものより食味がよかった

また、これらについても、「落花生優良種子普及事業において最も問題であったのは何か」という質問を追加した。

《灌漑事業－ｼﾞｬﾝﾊﾞｴ地区》

灌漑事業評価

・建設に関する知識や技術が向上した

・費用の一部負担には賛成であった

・労務提供（ｺﾞﾄﾝﾛﾖﾝ）には賛成であった

・住民が一部資材を調達するのには賛成である

・施工終了後には維持管理をする意識が芽生えた

・崩壊前の収量は以前に比べ増加した

・上記問題間のうち、最も重要な問題点について自由討論

《灌漑事業－ﾗﾄﾊﾞﾝ地区》

・建設に関する知識や技術が向上した

・費用の一部負担には賛成であった

・労務提供（ｺﾞﾄﾝﾛｺﾝ）には賛成であった

・住民が一部資材を調達するのには賛成である

・ﾗﾄﾊﾞﾝ地区灌漑事業に関する問題点について自由討論

③使用ツール

ｹﾞﾚﾝｹﾞ集落に準ずる

④前回との相違点

特筆すべき事項なし

⑤当日の状況と感想

予想されていたことであるが、ｶﾚﾝｹﾞ集落の評価会議では一部の参加者がかなり議論に熱くなり、JICA への提案をしきりに述べていた。特に灌漑は住民のニーズが高かったのか、結果に満足していなかったのか、熱くなる人が多いように感じられた。

また、当日はﾊﾞﾗｯｶ村役場の屋外にある会議場を使用して評価会議を実施したのであるが、その議論の熱さに水を差すように、途中から大雨が降り始め、人々の話し声が聞き取りにくい状況となってしまった。そこで C／P を参加者の前後に配置し、前の方と後ろの方でも一体化した議論が可能になるように努めたが、結局前の方に熱い人が集まり、後ろの方は控えめな人が集まってしまったので、住民同士の意見交換の場というよりは、一部の住民と JICA の話し合いという構図になってしまった。

開催方式自体に関しては、ｹﾞﾚﾝｹﾞ以降の経験もあり、問題は少なかったように思われる。

資料 11

第３部　評価会議の補足

第３部では、前２部を補完する意味で、評価会議をとりまく実施環境や実施に至るプロセス、また今後の参考となるように、今回の反省点について書いていく。この部は特に次の問題意識に基づき「私」という視点も含めた記述も部分的に心がけている。

その問題意識とは

報告者が例えば他の人だったら、また技術カウンターパートの性質がもう少し異なっていたら、という仮の話を許されない特殊の状況の中に実際の開発や援助があり、そこには必然的にその人なりの思想であったり、欲求であったり、生活観であったり、援助観といったものが持ち込まれているのではないか

ということである。こうした立場にたって考えてみると、今回の評価会議に与え得た、「私」という要素についても触れていかなければ、片手落ちだと思われる。よって、ここではそうした「私」自身考えた評価会議へのねらいや、評価会議を終えての反省が含まれている。

第１章　本評価会議のプロジェクト内での位置づけと貢献度

「評価会議」と「ニーズ会議」の関係

過去３年間、「ニーズ会議」という名の会議が、①村人自身が村の発展について話し合う機会を提供し、村の自治能力を高める、②村の定性的な情報を収集し、プロジェクト活動の効果測定に利用する２点を主たる目的として実施されてきており、報告者も同様の会議を開催するかどうか決断することが迫られていた。しかしながら、「ニーズ会議は」活動を実施するに従い、次のような問題が浮上してきたことが、昨年同会議を担当した渡辺隊員の報告書では指摘されていた。（詳しくは渡辺隊員の「第３回（９７年度）集落ニーズ会議報告書」参照）

問題１「村人の自治能力を高める場とならない」

原因「村人は会議の主旨をよく理解しておらず、ＪＩＣＡの支援を期待してニーズを語る傾向がある。よって出された結果に対して、住民自身が特別のアクションをとることがあまりない。」

問題２「効果測定のデータとして不十分」

原因「ニーズ会議を通して得られる【定性的情報】の指し示すところは、年毎のニーズ変遷であり、それを指標に活動がいかに住民のニーズを満たしてきたかを把握することが期待されている。しかし、実際はプロジェクトが決定されていく枠組み上、もともとニーズ会議の場では触れられることのない事業もプロジェクトとして立ち上がっており、この場合には効果測定ができない。」

つまり、「ニーズ会議」に求められる目的が、「ニーズ会議」という形式をともなって実施されるだけでは、不十分にしか達成されないことがここでは述べられている。同報告書の中では、この問題の解決策として、「ニーズ会議」の開催意義を調査目的とコミュニティ・ディベロップメントへの戦略としての目的の２つに分類した後、今後はより後者に比重を置いた会議に移行していくべきであるという。なぜなら、ニーズを聞いてそれをそのままに放置しておくよりは、その解決につとめるのが本来開発或いは開発援助に求められる姿であるからである。そして、これは村人が「ニーズ会議」を通して話し合い、確認した集落のニーズの中から、住民自身で再度プライオリティや実現の為のポテンシャルを考え直し、プロポーザルを作成するなど、具現化するプロセスを支援し続けていくことで達成されうるとある。

報告者としても、「ニーズ会議」後の展望が明らかになっていれば、「ニーズ会議」を開催すること自体は意義のあるものであると思われた。しかし、今回担当する際には、上記の問題点を整理し、会議の開催方法自体の見直しを試みた。

話しを少し一般的なところから始めると、人が何らかの行動を起こすのには、やはりそれなりの原因がある。その原因とは時や、場所や、人なりによってそれぞれであるだろうが、その際には、いつでも意識的・無意識的に関わらず、何らかの期待が発生しているからだということが、過去の研究で明らかにされている。また期待によって導き出された行動に関しては、それへの「個人的評価」が行われ、行為を継続するのか、中断するのか、投入量を増やすのか、減らすのか判断がなされているという。こうした期待と個人的評価の組み合わせによって、行動が形成されていくという説は、たんに机上の話しではなく、私たちの日常生活に当てはめてみるとより一層理解がされやすいだろう。

この説に乗っ取った上で、「ニーズ会議」の位置づけを考えてみると、ニーズ会議は人々の期待について話し合う場であった、と捉えることが可能である。ただ意図する内容が、住民はニーズ会議を通して、JICA から新たな援助をもらえることを前提にして期待について語り、JICA としては人々が新たな行動を導くために期待を語る場を設けようとしていたという違いが発生していたために、先程述べたような問題 1 が起こっていたのであろう。

今回の場合は、新たな行動への期待或いは JICA から新たな援助をもらえる期待としてどのようなものが挙げられるのか、ということを目的に会議を設けるのではなく、既に実施した行動にはどのような主観的評価がなされうるのかを話し合う為の会議を行いたいとまず考えた。新たな期待を導く前に、住民が生活を意識的に省みるステップを踏もうという試みである。この評価行為を経ることで、自らの生活をとりまく所与の環境を再整理し、その中から新たな期待とポテンシャルについて判断する材料を提供することができれば、「ニーズ会議」ともうまく連携され、村人の自助努力はより促進されるだろうと思われた。また「評価行為」の最中にも、勿論新たなニーズ（それが JICA に対してでも、住民自身に対してでも）が折り重なって生まれてくるだろうから、それも視野に入れて会議を開催したく、方法を考えた。

結果として、住民の日常生活の一部でしかない JICA プロジェクトを「評価」の題材として選んだ理由には次のようなことが挙げられる。第一には、具体的事例がなければ話しづらいと思われたことである。この時点では住民が「評価」ということを意識的に行うことに慣れているかどうか、全くわからないでいた。そうした状況で例えば日常生活全般にわたる自己評価を促し、問題点の発見や解決のためのアイデアを話し合ってもらっても、参加者の間で意見が共有できるのかは疑問であった。そこで、JICA の事業を例にあげ、問題や解決を話し合う場にすることで、「評価行為」の経験を積んでもらうこととした。

第二には具体的対象があったほうが良いだろうという点である。これは自助努力という観点からは少し目的を異にするが、「ニーズ会議」の場において、再三結果が直接プロジェクトには反映することがないということを説明したにも関わらず、住民はやはり JICA に対してのお願いをすることが多かった。そこで、お願いをされる対象としての JICA の位置はある程度確保しつつ、解決に向かっては JICA に期待するだけではなく、住民もその中でできることを探してほしいというソフトなやり口にするために、“JICA プロジェクトを活動修正するにあたり、どのような問題・解決があるかという形” で評価をしていくことが適していると思われた。

このように、今回の評価会議は形として JICA プロジェクトを扱っているのであるが、その目的はコミュニティ・ディベロップメント戦略の一つである「ニーズ会議」を代替或いは補完するという面を持っている。

「評価会議」の「コミュニティ・ディベロップメント」にもたらした意味
—評価会議の自己評価 1

では今回の評価会議は現在考えているところのコミュニティ・ディベロップメントへどれだけ寄与したのであろうか。まずそのことを記す前にコミュニティ・ディベロップメント戦略への自身の考えを明らか

にしてみたい。

昨今の開発戦略の中で"*住民参加型開発*"の妥当性が効率・効果・事業持続性などの面から、多くの研究者や実践者によって支持されているのは既知の通りである。そこでは今までの開発プロセスから除外され、裨益者と位置づけられていた住民をもっと積極的にプロセスの中に巻き込み、また巻き込むだけではなく、彼らが中心的な役割を担っていくことの必要性が訴えられている。"*住民参加*"とは文字どおり「住民」が「参加」することなのであるが、参加の対象は「開発資源」であり、「開発プロセス」である。また「参加」の程度としては例えば資源を利用する、口を挟む、といった消極的参加から、資源の利活用を考え実際に運営する、開発計画を策定し自ら実行するといった積極的参加まで幅があり、前者のような場合は人によって、「真の意味の参加ではないので、これを参加型開発と名づけるのは相応しくない」と捉えているようである。

私の考えるところのコミュニティ・ディベロップメント戦略も大筋においてこの"*住民参加型開発*"に沿ったものである。理想的にいえば、住民がプロジェクトのイニシアティヴをとり、自らの知恵をもって開発資源を発掘し、その利活用法を考え、さらにそれに基づいた開発が実践されていくのであれば、開発の効果も継続性も保証されるのではないかと考えている。しかしそうした真の意味の参加が、現状をきちんと把握した上では、理想の域を脱することができないことから、段階的に、できる範囲において"*住民参加*"を採り入れていくことで、活力あるコミュニティをつくり出すことが可能となってくるのではないかと考える。

では、今回の評価会議の開催方式などを振り返った際、目標あるいは理想としてのコミュニティ・ディベロップメント戦略とどれだけかけ離れているか、逆にその目標に向かってどれかけ前進したのか、ということを次に考えてみたい。

＜住民の中から会議のコーディネーターを選出した＞

第2部でも触れた通り、これはコーディネーターに会議運営法を身につけてもらいたいという意図があったが、ｶﾞﾙ集落を除き、ことごとく失敗した。考えられる理由としては事前の打ち合わせが十分ではなかった、コーディネーターの選出を村の有力者にお願いしたので、最も適した人材がコーディネーターとなったわけではなかった、などが挙げられる。前者に関連しては、そもそも打ち合わせ段階ではほぼ開催方式をこちらが一方的に決定しており、それを下手なインドネシア語で説明するだけであったので、選出されたコーディネーターもこちらの意味することがわからず、混乱が生じてしまったと思われる。

失敗の中から各コーディネーターが何かを学んだかという点に関しては、未だ事後フォローを行っていないので、何とも言い難い面もあるが、会議中の彼らの挙動を観察している限りにおいては、そうした面は見られなかった。

よって、コーディネーターを村人から選択したということによるコミュニティ・ディベロップメントへの寄与は、今回に関してはほとんど無いに等しかったと言えるのではないだろうか。

＜実施までのプロセスをJICAが掌握していた＞

前項と少し重なるが、今回の評価会議はJICA側のニーズとして各集落に伝えられ、こちらで決めた開

催方式に従って会議を実施した。準備段階として村側に対して行ったアプローチは、村長及び集落長への開催意図説明と、集落によってはコーディネーターへの事前説明のみであり、開催方式自体をまたそもそも評価会議を開催する意義自体をコーディネーターや住民と十分に話し合うことはなかった。

この最大の理由はそれだけの時間がとれなかったことにあるが、結果的に本評価会議を行うに至るプロセスでは"*住民と共に考えたり*"、"*住民が参加する*"ことないまま会議が実施され、適正な方式が採られず住民を混乱させてしまうこともあった。住民にとってしてみても、評価会議を行うまでにそれへの試行錯誤をする機会がなく、このことは先の"*住民参加*"の視点からしてみれば、完全に失敗であったと思われる。

＜住民が評価行為を経験した＞

コミュニティ・ディベロップメントを促進する上で評価を体験しておくことの意義は前項で述べたので繰り返さないが、今回の評価会議はこの面では一定の成功を収めたのではないかと考えられる。但しこのこと自体で完結できる事柄は一つもなく、これを一つのステップとして位置づけ、さらに自分の生活を振り返った後の行動喚起を追っていかなければ、意味をなさないだろう。

＜住民がプロジェクト評価に参加した＞

先の事柄と少し相矛盾するようであるが、開発プロセスである評価に参加することで、住民のプロジェクトへの主体性が増したかといえば、ケースによる相違はあるにしろ必ずしも正しくないと思われる。もともとこちらが意図した面もあるが、今回評価の結果でてきた新たなニーズ（例えばメロンの優良種子使用）に対して、住民が何かアクションをとろうという動きはほとんど見られず、JICA へのお願いをしてくることが多かった。これはプロジェクトの範囲なので、「JICA も活動修正を行うが、住民も自分達でできることを考えて欲しい」という言い方で、その場その場を切り抜けていたが、同じような依存体質が日常生活の多局面にわたり、住民の心の中に在りつづけるとするのならば、プロジェクト評価に参加したことだけではコミュニティ・ディベロップメントを促進する要因にはなり得なかったと考えられる。

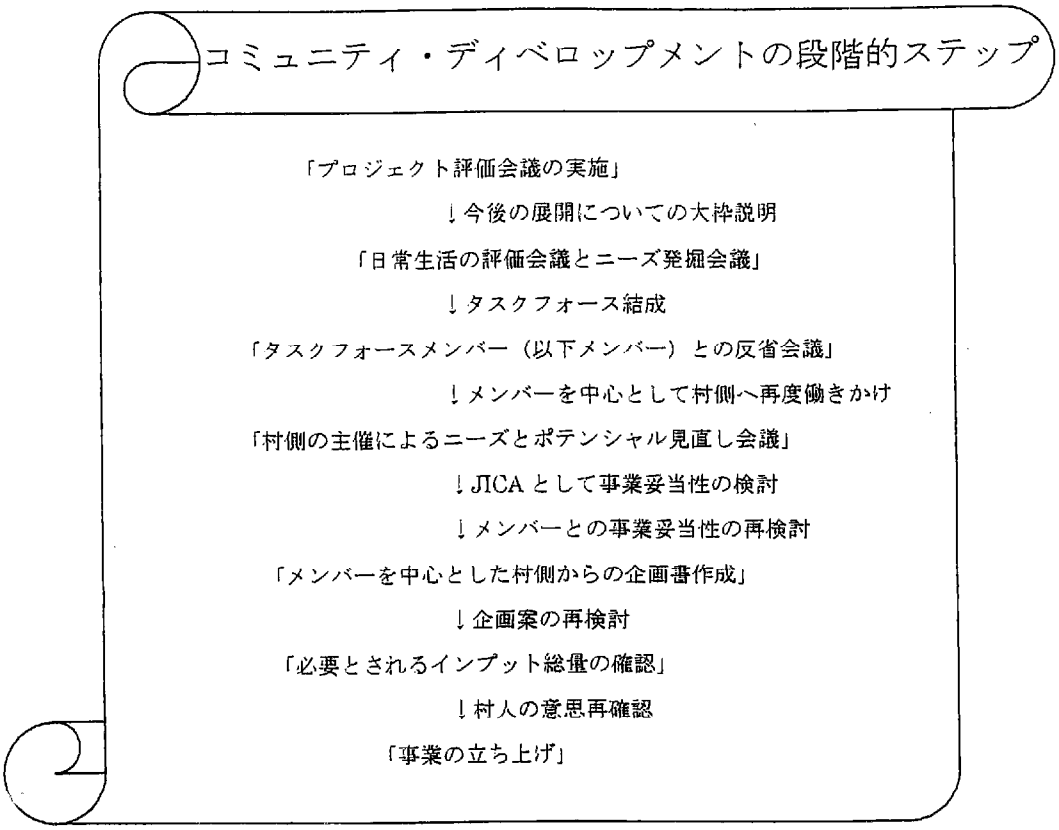
＜評価会議にかかる費用を全て JICA が負担した＞

これは、今までどの項にも書いてこなかったが、今回使用したツールは勿論のこと、毎回の会議に用意されたお茶菓子とコーヒー及び砂糖代は全て JICA のプロジェクト費用によって賄われていた。今回の会議が、もともと JICA のニーズによって始められた上、こちらから各集落のフォーマル・インフォーマルリーダーに招待状を出したので、形上こうすることが最適であった。今回のそのことにはとりわけ問題を感じないのであるが、ここの地域では例えばこうした会議では主催となる人が参加者を接待しなければならず、そのことが住民会議を活発にしていかない一つの理由であるということをある住民から聞かされたことがある。

コミュニティ・ディベロップメントが促進されていく過程では、幾度となく住民会議が開催されていくだろうというのが私の予想であるが、そうしたことを考えてみると、例えば皆が集まって皆で集落のための話し合いをする時には、各自お茶菓子を持ち合うというようなクセがついた方がよいのかもしれない（あ

るいは輪番制)。

以上をまとめてみると、今回の評価会議自体で与えられたコミュニティ・ディベロップメントへの寄与度合いは非常に限定されたものであり、これを"*住民参加型*"と呼ぶには甚だ恥ずかしい面があるといえる。ただ指向としてはあくまでも"*住民参加型指向*"であったことを付け加えておき、今後報告者としては次のようなプロセスを経ることで、コミュニティ・ディベロップメントが促進されていくのではないかと考えていることを記しておきたい。



これは大枠の、かつ現時点での考えであり、実際の計画案は後に書く企画書に譲りたいが、今年度はこの流れを新規の「村落自助努力開発支援事業」として実施する予定であり、その為の予算もトータルでRp 20.000.000-約２５万円程度計上している。今回の反省からも、きっかけの段階でこちらが主導権を握っていることは止むを得ない面があるということがいえるが、順次タスクフォースメンバーが、主導権を握れるような実務能力を付与し、経験を増やせるようなアプローチをとる予定である。また対象集落は２集落程度を予定しており、予算配分はその集落の要求する事業内容によって異なってくると思われる。ただし、事業の実施条件として、費用の半分を村側負担できないか、と考えている。これは住民の手の届く範囲の小規模な事業を実施しなければ、結局はハードを伴うにしろ伴わないにしろ贈り物という意識を取り除けず、事業としての持続性に問題が残ると思われるからである。

この事業は、コミュニティ・ディベロップメントを促進する一つの試みであるが、あくまでもお願いさ

れる立場としての JICA は保持しており、従って外部者の役割も未だ大きい事業であるので、これによって住民による自助努力が完全に達成されると判断するのは早計であろう。また事業が立ち上がったことに満足せず、効果の質と及ぶ範囲にも気を遣い続けなければならないことも確かである。

ただ、日常的な生活環境、人間環境の重要な側面は、ある表面的な変化によってからは影響を受けえないという立場にたって、対象集落を見渡してみると、「お願いの好きな住民」が浮かび上がってくる。そこを出発点として、"*住民参加型開発*" を目指し、お願いの好きな住民がいかに、表面上の変化としてではなく、内面に捉えた変化を生み出すかを考えた上で、あえて外部者が促進するアプローチとしては、一つの形となり得るのではないだろうか。

「評価会議」と「プロジェクト活動」の関係

このように一方では「コミュニティ・ディベロップメント戦略」の一ステップとしての「評価会議」があり、今後に続く独自の展開が期待されている。しかし、他方では「プロジェクト評価」という点に重点が置かれ、今回の「評価会議」が位置づけられていることもまた事実である。それは次のようなことを理由とする。

過去、プロジェクト内で評価という行為が実施されてきたのは、例えば分野別には川添隊員のチェンネトイレ建設に関する渡辺（雅）隊員によるモニタリングであったり、小國隊員の実施したダチポン飲料水供給に関する溝江隊員のモニタリング、橘隊員が自ら実施したハラパン村での市場修復評価会議などが挙げられる。また全体規模で実施されたのは、日本からやってきた中間評価団が実施した評価がある。

しかし、こうした分野毎の努力の例は部分的に見受けられていたが、全体規模として、内部者が、JICA 活動の評価を実施する試みは今までにされてこなかった。とりわけ本チームプロジェクトの活動方針にもなっている "*住民参加型開発*" を推し進める上では、「内部者である住民」が既存のプロジェクトをどのように捉えているかという定性的情報を把握する評価が必要であるが、それらは各分野毎に隊員がインフォーマルな場で行う住民との意見交換に委ねられ、チーム全体として体系化されることはなかった。

また、時期としても 5 年計画の中で 4 年が終了している現在では活動の実績が蓄積しており、全体規模の評価をするのに適していた上、残り一年の活動を効果的にするためには、現段階で評価を行い、活動を改めて見直す必要があると考えていた。

そこで、実施された各事業に対し住民がどのような反応を有していたのかを調べ、その結果を各プロジェクト活動に反映していくことを期待した「住民による評価会議」を開催することとした。

「評価会議」の「プロジェクト評価」へもたらした意味

—評価会議の自己評価 2

一般的な話しから始めると、通常援助プロジェクトの中では、評価は概ね次のような目的を持って実施される。

・事業の意図した目標に照らし合わせ、実際の活動の進捗状況及び解決すべき課題を探る
・事業実施によるインパクトを測る
・事業実施後の継続性・継続法を検討する
・事業の妥当性を検討する
・今後同様の事業を他地域で実施する場合の参考とする

このため、評価結果の情報利用者としては、事業に関わった住民・地方行政官・中央政府機関・実施機関（JICA など）・実施担当者などが考えられる。また情報の提供者としては、事業に関与した様々なアクターー住民・地方行政官・実施担当者など内部の人間による自己評価と事業に深く関与しなかったアクターー現地ＮＧＯ・調査団など外部の人間による評価がありうるだろう，そしてこれらは求められる評価目的に従って、様々な方法が組み合わされる。逆に言えば採られる方法によって、収集できる情報の質と範囲がある程度決定されてくる。

そこで、ここでは開催方式を振り返りながら、今回の評価会議がプロジェクト評価という面から、どのような貢献ができたのか、ということを考えてみたい。

まず全体的なことでは、今回の情報提供者には等しく住民が選ばれ、住民による評価会議を実施した。住民が会議に参加するモチベーションを持ち得るために最も必要なこととして気遣ったのは「住民にとって必要なことを話し合うこと」である。その為のスタンスとしては先程も述べた通りお願いをされる対象としての JICA の位置をある程度保持し、会議の結果が何らかの形でプロジェクトに反映されていくことが有り得ることを暗黙の期待として持たせたままでいた。話し合いの内容も（結果としていくつかの例外があったが)、住民が利益を得るために今の JICA の問題点を話し合ったり、解決案を提示してもらうようにした。よってこの方式を採る限りでは、JICA の解決すべき課題を探るのには適していたと思われる。

また住民が参加し、話し合いを行ういわゆる“*住民参加型評価*”では、住民の生々しい声を聞くことで、事業実施による心理的インパクト（数値としてのそれではなく、あくまでも住民の主観的判断ー例えば牛が何頭仔牛を産んだかという結果ではなく、一頭産まれた仔牛にどの程度満足しているかということ）を測定したりすることも一部可能であったし、その解釈の中からは、今後同様の事業を他地域で行う教訓や、事業の与えた効果も引き出せたのではないかと思われる。

さらにお願いをされる JICA からの要請として、「住民の意見はわかったから、今度は JICA と住民のよりよい協力法を一緒に考えようよ」という形で話しを進行することで、事業の継続法についてもある程度までは考える機会があったといえる。

しかし、例えば今回の評価会議では事業の妥当性（特に費用ー効果、費用ー便益などからみる妥当性）については、全く触れることがない項目であったし、もともと事業の意図した目標値がないプロジェクトなので、それと比較した現在の進捗状況などは理解できない。つまり、全てが住民の判断によってなされる主観的評価にベースを置いているわけだから、もともと住民側には存在しない問題に関するプロジェクト評価ー例えば事業が妥当か妥当でないか、というよりは妥当であることを前提に、どれだけ取り分があるか、というのが住民の基本的な考え方ーには貢献できにくい。

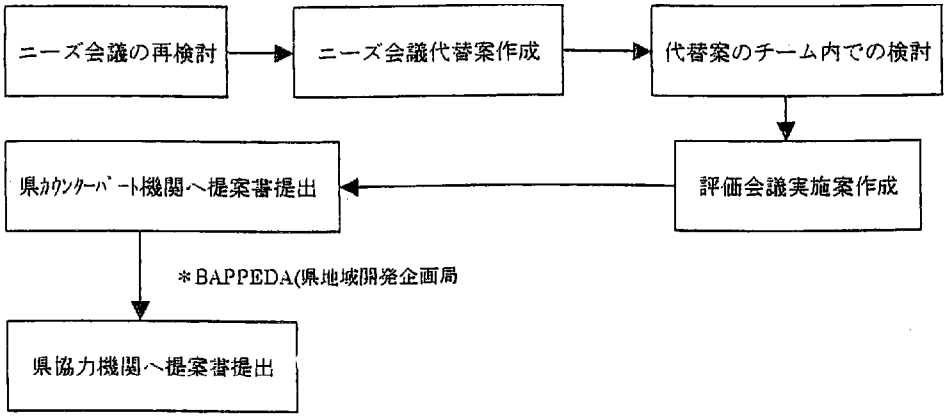
これを個別の集落・分野に注目していくと、さらにその寄与度合いは限定的なものとなると思われる。例えば第２部で見てきた通り、ﾜﾄｳ集落での山羊銀行プロジェクトは既に終了している案件であり、これ

を継続させる予定は JICA ・住民双方にとってもない，よって、ここでは今後同様の事業を他地域で行う際の参考とするために、問題点を話し合い、評価とした。またﾍﾞﾚﾏﾘﾝﾎﾞ集落での生活用水プロジェクトは既に完了している案件であり、事業完了後の継続法を住民達で考えるために、現在の水使用状況についての問題点を話し合い、評価とした。このようにねらいの段階から既に異なる目的で実施されていたという事実に加え、結果から後ろ向きに考察してみると、集落の中では会議自体の運営が円滑に進んでいなかったり、一口に住民が参加したと言っても、実際の発言は一部の者が独占していた場合もあり、住民の下した評価が果たして情報としてどこまで有効であるものか疑問な点も多い，

よって、今回のような住民評価会議では一定の寄与はプロジェクト評価に対して行いえるが、網羅されにくい事柄も多々あり、また実施状況によっては、その貢献できる範囲がさらに狭まることがあったということがいえよう。

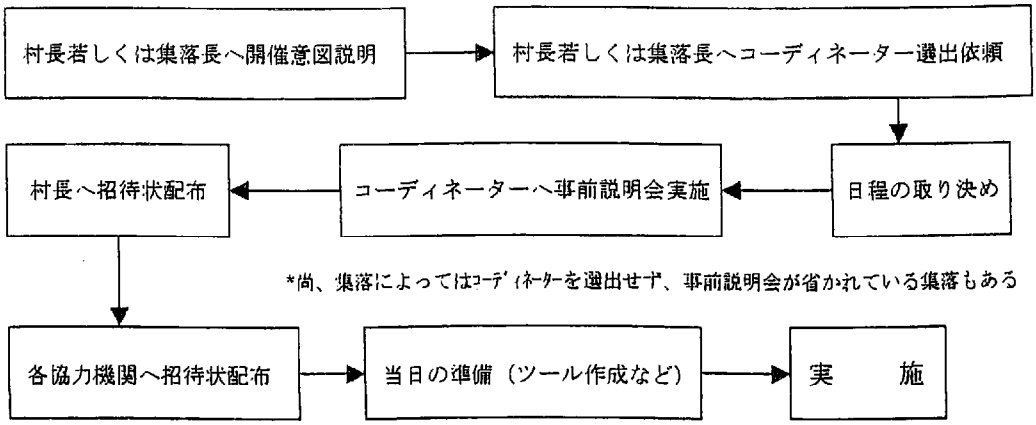
第 2 章　評価会議開始までの流れ

＜事前準備＞



＊県家畜事務所：県作物事務所・県村落開発局：県公共事業局

＜各集落＞



第3章　今回の反省点

住民参加型評価

本チームプロジェクトにおいては、各事業計画の最終的な決定権が隊員各自に委ねられており、今回の評価会議を実施すると決定したのも報告者自身である。既述の通り、今回の評価会議は住民による評価会議が実施されたわけであるが、それを内面から支えていたものとしては、"*住民参加型評価*"を行いたい、という自身の欲求が挙げられる。無論、開発の基本に立ち返れば、自身の欲求を満たすこと以上に、それが一体何の為に、誰の為に行われるかということを考えねばならないので、介入者の希望は考えなくてよいものとして普通取捨される。しかし、今回の経緯を改めて考えてみれば、むしろニーズ会議を再検討する過程で、評価会議をすることをよしと判断した時には既に、枠組みとしての"*住民参加型評価*"は決まっていた。現在のチームプロジェクトが"*住民参加型開発*"のアプローチを採り入れようとしている限り、その評価も"*住民参加型*"であってしかるべきだという考えが先にあり、その後各集落で用いられる方法論を考えた。この結果が、その方法においても紆余曲折し、目的を達成するのにも非常に限定的な貢献しか得られなかったことは、既に本報告書で述べられている通りである。また結局はこのことにより、参加した住民にも、カウンターパートにも、また隊員の仲間達にもご迷惑をおかけしたことについては、ここでお詫び申し上げたい。

報告者がこの文脈の中で述べたいことは、"*住民参加型*"を信じるという気持ちが間違いで、それを悔い改めなければいけない、ということではない。がしかし、"*住民参加型評価*"を実施する上で、それがもつイメージに酔いしれて、部分的に採り入れようとしても効果はなかった、ということである。("*住民参加型評価*"には勿論決まった一つのやり方があるのではないから、ここでの部分的とは、例えば"*住民がプロジェクト評価に参加する*"こと自体や、"*ファシリティターを村から選び、ファシリティターのもとに会議を開催する*"であり、それは方向を見定めた段階的ステップとは異なる)。つまり、どういう社会状況においてはどういうアプローチがとられるべきなのか、(本当に客観的な分析をすることは人間である以上難しいし、開発の現場に携わった経験が少ないから思い入れも強くなりがちなのは目をつぶっても)、自分なりによく考え直す必要があったと思われる。

事前説明

今回実施された集落のいくつかは、コーディネーターによって会議の進行が図られたが、失敗してしまった。この理由に先程は事前の説明不足と報告者のイ語能力不足と書き、実際それはその通りなのであるが、その辺りの事情を少し書いておきたい。

まずあらかじめ説明しておくと、報告者である私は、ファシリティターの養成についてきちんと勉強したことがなく、かつ事前に経験したこともない。よって採られた方法も、かなりファシリティター(今回の場合はコーディネーター)に期待した事前説明であったと後に思ったが、それを変える好ましい術を知らなかった。

今回はコーディネーターの選出には基本的にこちらから誰と指名することなく、村のフォーマル・インフォーマルリーダーに働きかけ、開催意図を説明すると同時に、そうした会の司会を任せられそうな人を選出してもらった。彼らが集まれそうな日に、事前説明会を行い、その際には開催意図の書かれたプリント、会議の進行について書かれたプリント、各質問のねらいについて書かれたプリント、また当日使用するツールの一部を用意し、それぞれに配布した。

実際の説明はプリントに従いながら行い、適宜コーディネーターに質問を求めた。シュミレートをしてもらったことも何回かはあったが、あまり本人が乗り気でないようなので、それ以降は無理をさせずに、言葉による説明を基本に実施した。

大抵4～5人程度集まるメンバーの中には、理解も早い人もいたし、理解できてないと思われる人もいたが、「大丈夫、大丈夫」が彼らのいつもの返答であったので、それについ期待をしてしまった。一回の事前説明会は大体1時間から1時間半程度であり、あまり何回も集めることに気が引けてしまったので、一回で終了するように心がけた。

結局、比較的うまくいったと思われるガル集落では、こうした至らない説明会でも十分に主旨と方法を理解してくれた住民がいたからであり、本人の資質によるところが大きいものであった。例えば、会議の方法をあらかじめこちらが決めてしまうのであれば、少なくともそれをきちんと理解するような事前説明会の方法も確立していなければ、住民が混乱してしまうのは、実に当たり前のことである。

さらに先ほども述べたが、"*住民参加型*" アプローチに近づけていく為には、住民も交えて開催方式、開催意図を確認していくことが好ましかっただろう。今回の場合は準備の開始が1月の半ばを過ぎた頃からで、対象10集落を、農閑期である2月から4月の間に終了させなければいけないことから、1集落にかけられる時間が極端に少なくなってしまった。

今後、本当にコミュニティ・ディベロップメントや住民参加を念頭に事業展開を図っていくのならば、十分な準備期間をとれるために、対象をかなり限定していくべきであろう。

その他

特に気づいた点は第1部から第3部の中で、述べてきた通りである。また新たな発見が期待されるのは、続く第4部が完成したときであろう。